

日本も元気にする青年海外協力隊 ～世界を元気にした人は、日本も元気にできる！～

JICA 関西 国際協力推進員 上野 貴子

昨今、企業の若手社員の育成のため青年海外協力隊へ参加し、開発途上国でのボランティア活動の経験により、ビジネスに不可欠な幅広い視野、高度なコミュニケーション能力、異文化適応能力などを身に付けさせ、帰国後に企業活動へ還元させることが期待されています。企業活動がグローバル化する中、それに対応するためのグローバルな視野や素養を備えた人材の確保も喫緊の課題となっています。

「開発途上国を元気にしたい」と JICA の青年海外協力隊に参加した人たち。海外でのボランティア活動を終えて帰国した彼らは、現在「日本の地域を元気にする人財」として、関西で活躍しています。今回は、彼らに昨今必要とされるグローバル人材についてインタビューしてきました！

【高林 健一さん 西日本電信通信株式会社 大阪支店 第一法人営業部】

(派遣国：スリランカ 職種：コンピューター技術)

現職参加制度を利用し、スリランカの職業訓練校に赴任し IT コースを受け持つ。

帰国後は、隊員経験を有効活用し、府下の都市開発案件を担当する。

① 現職参加された経緯

学生時代に途上国をバックパッカーで旅をし、各国の脆弱なインフラ環境を目の当たりにし、自分が何か貢献できる仕事を志しました。世界に誇れるインフラ企業である NTT 西日本に入社後、同社の協力隊経験者の先輩が生き活きと自信をもって任国や活動の様子を語る姿に共感し応募しました。折しも、スリランカで公共整備指導の要請があり、職業訓練校であるゴール技術短大に IT コースの講師として赴任しました。学生向けの情報通信技術の授業を受け持つとともに同僚に対する技術指導を行いました。

② スリランカと日本の違い

日本の方がシステマティックな部分もありますが、人と人のつながりを大切にする姿勢は同じだと思います。ただ、宗教観に違いがあり、生徒たちがお坊さんの足の甲に額をつけて挨拶する姿には驚きました。



(明るく元気な生徒たち！)

③ ご苦労されたこと

現地の活動では求められているものと現状のギャップに戸惑いジレンマを抱えました。公用語であるシンハラ語も赴任当初苦労しまし



(授業の様子です)

たが、仲間ができるにつれコミュニケーションに困らなくなりました。また、「わからないものはわからない！」と言える度胸もつきました(笑)

④ 協力隊の経験がどのように現在のお仕事に活かされていますか



(日本語コースの生徒たちと町の祭りでのよさこい踊りを披露しました。)

現地では自分が頑張るというよりも、現地の人にやってもらえないといけないことがほとんどです。いかに粘り強く現地の人を巻き込

み、成果を挙げるかという事を会得したので、現在の仕事ではその姿勢が役立っています。

⑤ グローバル人材とは

相手を理解し思いやり、そして自分もグローバルな社会の一員として認められる人だと思います。自分のキャラクターを持ちながら、人とのコミュニケーションのやり方を見つけることが大切です。

⑥ 海外での就労や青年海外協力隊への参加を希望される方へのメッセージ

海外は日本以上に競争社会ですので、臆せず発言し自分をアピールし、その緊張感の中で自分を高めていくことが必要です。

【北田 薫さん 西日本電信電話株式会社 第一法人営業部】

(派遣国：カンボジア 職種：システムエンジニア)

高林健一さんを青年海外協力隊参加へ導いた先輩です！

現職参加制度を利用し、青年海外協力隊としてカンボジアの 計画省で統計データの Web 公開に向けスーパーバイザーとして赴任。カンボジアと日本を IP テレビ電話を使って遠隔授業活動を実施。帰国後は、教育 ICT (information communication technology) 活用コーディネーターとして教育機関のシステムネットワーク構築業務を担当しています。

① 現職参加された経緯

協力隊参加前も、教育 ICT を社内を担当しており、当時はまだほとんど実現できなかった、インターネットを使用しての海外と日本の教育現場をつなぐ交流授業を実現したいと思っていました。特にインフラが整っていないため途上国との



(孤児院でのインターネットライブ授業)

交流授業は困難な時代でした。日本の子供達と途上国との関わりの中で、一方的に寄付をする形ではなく、海外と日本の教育現場をインターネットでつなぎ、顔を見てリアルタイムに話をすることにより、相互に現状を知ることができ、お互いに必要な支援や子ども達の将来に繋がる交流が可能になります。それを実現するためには、私が途上国に暮らすことが必要であると思い、また国際協力の主旨にも合致すると思い協力隊に参加しました。

② カンボジアと日本との違い

人のつながりが深いことでしょうか。あと、先生などの目上に対する強い尊敬心を持っています。

③ ご苦労されたこと

配置された省庁では、カウンターパートは、待遇が低くアルバイトをするため職場にほとんど来ない職員であったため、活動が困難でした。そんな環境を踏まえ試行錯誤の後、活動の形を変え、Web制作手法の授業を複数の職員に実施する体制を作り、活動を再スタートしました。また、もう



(計画省での授業風景)

ひとつの活動のインターネットライブ授業では、休日返上で学校の通信環境やカンボジアから授業に参加する学校の調査、日本の学校への公募用 Web サイト作成など実施に向けた環境を整え、他の協力隊員の協力もあり派遣期間 2 年間で 1000 人を超える子ども達がインターネットライブ授業を体験する事が出来ました。

④ 協力隊の経験がどのように現在のお仕事に活かされていますか

日本の職場に復帰後も専門家としてカンボジアに再赴任し、カンボジア日本センターで ICT 活用による交流事業の技術移転の実施や、JICA 集団研修のコースリーダーとして「デジタル・ディバイド解消のための ICT 活用コーディネーター育成研修」の企画や講師を担当するなど、現職の傍ら国際協力事業にも携わっています。

⑤ グローバル人材とは

自分でアイデアをもってチャレンジ精神のある人です。ここ 6 年から 7 年で急激な日本社会の変化を感じています。経済の低迷などを様々な背景はありますが、団塊の世代の子ども達が十分にモノに恵まれた豊かな環境で育ってきたため、日本人の特に若者にハングリーさが足りないように思います。

⑥ 海外での就労や青年海外協力隊を目指す人にメッセージ

相手の国の人や社会をよく知る事が大事。そして、その国



(帰国後、JICA 集団研修実施のためルワンダへ)

に必要な事の中から自分ができることに取り組んでください。異なる文化で生活し、共に働く中で、問題解決の毎日過ごすことがグローバル人材の育成につながります。

【インタビューを終えて】

「外国人という単語は、外国と日本を対比させる言葉に過ぎない。意識することはなくなった！」と笑う高林さんはまさにグローバルに国境を飛び越えた方でした。一方、「教育現場では自分がどんな人になりたいのかわかるような環境づくり、海外に出て行く壁を低くするモチベーションづくりが大切です。」と真摯なまなざしでカンボジアと日本の教育について語る北田さんの姿は、まさに現役の青年海外協力隊マインドそのもの。

グローバル化が進む社会で青年海外協力隊経験者の貴重な体験や、身に付いた国際感覚は重要なファクターとして企業・現場で不可欠な存在です。彼らの活動を通じて、JICA の青年海外協力隊事業をさらに理解していただければ幸いです。